

北海道 大野記念 WATCHMAN導入

心原性脳卒中を予防へ

西区の北海道大野記念病院（齋藤孝次理事長、入江伸介院長・276床）は、心原性血栓塞栓症による脳卒中の予防へ、左心耳閉鎖システム（WATCHMAN）を導入した。心房細動があり脳卒中予防の必要があるが、出血リスクがあるため長期的に抗凝薬が使用困難な患者等の治療に活用する。

心房細動は、心房が細かく震えることで起こる不整脈の一つ。これにより心房内の血液循環が悪化することで生じる血栓が、心臓から脳の血管に

到達すると脳梗塞を発症する。

血栓の発生を抑えるには、抗凝薬の服用が第一選択となるが、消化管出血や脳出血などの出血

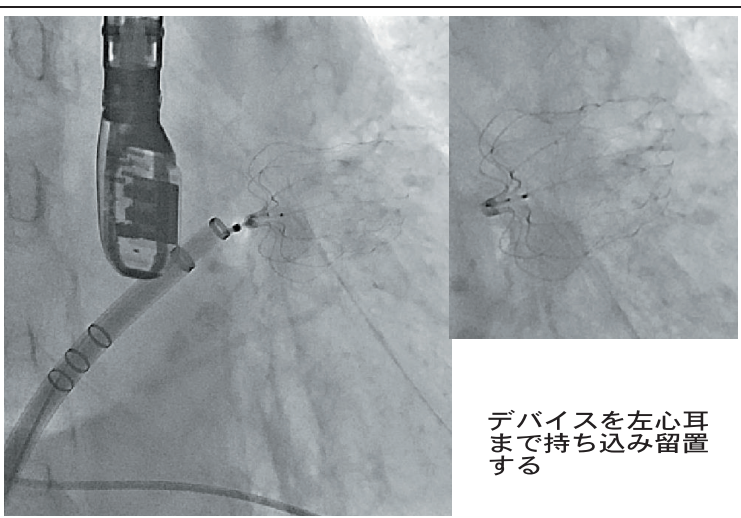
リスクが高い場合は継続が難しい。こうした患者の治療法として、心房細動由来の血栓の9割が生じる左心耳の切除や、クリップによる閉鎖などの外科手術があるが、開胸を必要とすることから高齢者には負担が大きいのが課題だ。WATCHMANは、先端にデバイスを装着し

一時的には抗凝薬を継続する必要があり、左心耳内部の閉鎖までに約45日ほどかかるため、一定期間は術後のフォローが必要となる。

実施施設として認められるには、日本循環器学

会や日本不整脈心電学会等関連学会の認定専門医の在籍、専門医研修施設・関連施設のほか、Structural Heart Disease に対するカテーテル手術あるいは左心房におけるカテーテルアブレーション手術を、前年に50例以上実施していることなどの条件が定められている。また、医師にも、各種カテーテル手術や心房中隔穿刺の経験等が求められる。道内の実施施設は限られている。

堀巨良長がインプランタを務め、三浦史郎院長と呉林英悟医師が高度な経食道エコーで手術をフォローしており、今後、年間10〜20例ほどの実施を予定している。三山主任医師は、「心房細動があり、抗凝薬法を行っている患者の中で、出血を経験した人は少なくないはず」と指摘する。医療者を含め、同システムの啓発を進めるとともに、不整脈専門外来を窓口として、他施設からの患者紹介に積極的に対応していく考えだ。



左心耳にWATCHMANデバイスを挿入する様子